



みやぎ 2025
第48回 全国育樹祭
次世代へ みどりのかけ橋 森づくり

併催行事



東北・宮城の
ちよつとおもしろい
森のおはなし



育 IKURIN 林
交流集会

開催の記録

テーマ

「地域と紡ぐ森林づくり」～次世代へ伝えるメッセージ～

主催：宮城県・公益社団法人国土緑化推進機構

目次

開催概要	1
オープニングアクト	2
「桜プロジェクト」桜色の未来 ～桜色活力剤で気候変動に具体的な対策を～ 宮城県農業高等学校 科学部	
開会・来賓挨拶	6
主催者挨拶：公益社団法人国土緑化推進機構 常務理事 今泉 裕治	
来賓挨拶：林野庁 森林整備部 研究指導課長 松本 純治	
来賓挨拶：一般社団法人全国林業改良普及協会 専務理事 中山 聡	
歓迎挨拶：名取市長 山田 司郎	
事例発表	10
事例①「日本産漆で文化財を未来につなぐ」 株式会社小西美術工藝社 副社長兼二戸支社長 福田 達胤	
事例②「木材の可能性と魅力」 公益社団法人日本建築家協会(JIA) 宮城地域会長 齋藤 健太郎	
事例③「最強の海岸防災林を再生する」 公益財団法人オイスカ Global Sustainability Mission 担当部長 吉田 俊通	
パネルディスカッション	27
テーマ：「地域と紡ぐ森林づくり」～次世代へ伝えるメッセージ～ [コーディネーター] 株式会社モリアゲ代表取締役 長野 麻子 [パネリスト] 福田 達胤 / 齋藤 健太郎 / 吉田 俊通 / 宮城県農業高等学校 科学部	
閉会挨拶	35
宮城県 仙台地方振興事務所長 嘉藤 俊雄	

開催概要

第48回全国育樹祭の併催行事として、森を守り育てることの大切さを広く知ってもらうため、「地域と紡ぐ森林づくり」～次世代へ伝えるメッセージ～をテーマに、事例発表とパネルディスカッションを行いました。

主催：宮城県・公益社団法人国土緑化推進機構

後援：林野庁東北森林管理局、仙台森林管理署、宮城北部森林管理署、名取市、宮城県森林組合連合会、宮城県木材協同組合、公益社団法人宮城県緑化推進委員会、公益社団法人日本建築家協会東北支部宮城地域会、宮城県農林種苗農業協同組合、宮城県CLT等普及推進協議会、一般社団法人宮城県建築士事務所協会、一般社団法人宮城県建築士会、岩手県浄法寺漆生産組合、鳴子漆工芸会、みやぎ海岸防災林・森林づくり協議会

会場：名取市文化会館 中ホール（宮城県名取市）

日時：令和7年10月4日（土）13：30～16：30

出演：

- 司会：宮城県農業高等学校 科学部
- オープニングアクト：宮城県農業高等学校「桜プロジェクト」
- プレゼンター：株式会社小西美術工藝社 副社長兼二戸支社長
福田 達胤
公益社団法人日本建築家協会(JIA) 宮城地域会長
齋藤 健太郎
公益財団法人オイスカ Global Sustainability Mission 担当部長
吉田 俊通
- コーディネーター：株式会社モリアゲ 代表取締役
長野 麻子



オープニングアクト「桜プロジェクト」



宮城県農業高等学校 科学部

山本 柚花 小野 結衣 田村 昂大 阿部 結希乃
小野寺 麗 松森 樹由 工藤 綾人 後藤 優羽

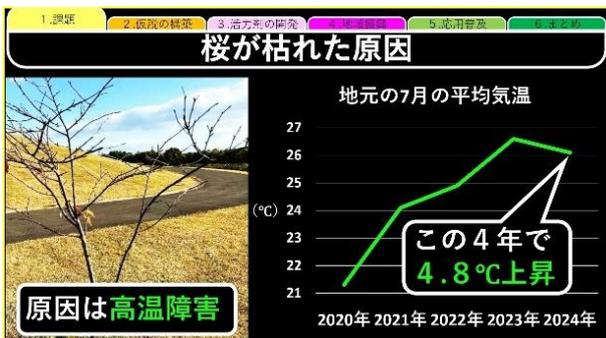
東日本大震災からの復興と地域振興を掲げ、地域住民と協力しながら桜を植え、未来に残る風景と人々のつながりを育てていくことを目的として科学部の生徒が主体となって取り組むプロジェクト。

1.課題



本校には、東日本大震災により津波の被害を受け、奇跡的に生き残った桜があります。「地域を笑顔に」という想いで、塩害が発生する土地に桜を植えて地域振興を続けてきました。

そんな中、「さくら名所100選」に選ばれる柴田町の佐藤さんから、「桜が枯れて困っている」と連絡を受け、現地を訪れると、枯れかけた桜を目にしたのです。塩害は葉の縁から変色しますが、これは先から変色しています。その被害は年々拡大し続けているとのこと。このままでは、地域資源である桜が全滅すると危機感を覚え、調査すると「高温障害」と判明。



症状が出る7月の平均気温は、4年間で4.8度も上昇。

これでは名所の桜が失われます。そこで猛暑に負けない活力剤を開発し、枯れゆく桜を復活させることで、地域振興を実現したので報告します。

2.仮説の構築



昨年度、海沿いでの桜の植樹を成功させるために、使い捨てカイロとクエン酸を使って、二価鉄イオンを含む発根促進剤を開発しました。これを使用しない海沿いの桜は全て枯れたのに対し、使用した桜は順調に育ち、発根促進の効果を実感。



そこで、発根量が多ければ高温にも耐えられると仮説を構築しました。早速、発根促進剤を植樹に使用すると、初期の生育は順調に進みますが、初夏には全滅。調査すると、柴田町と同じ高温障害と判明。仮説は間違いだと気づき、試験は振り出しに戻りました。そんな中、東京大学の木村特任准教授から「野菜の高温乾燥には酢酸が有効だが、桜に効くかは分からない」と助言を受けました。僅かな可能性に賭け、桜に酢酸を使用することで高温障害を防げると仮説を再構築しました。

3.活力剤の開発

植樹はいつも海沿いで行うため、耐塩性効果は必須です。これまで使い捨てカイロとクエン酸を植樹の際に加えることで耐塩性を発揮していました。これに酢酸を加えれば、高温乾燥耐性を兼ね備えた新資材になると考えました。



しかし、実際の試験では、酢酸濃度が高すぎると枯れ、低すぎると効果が出ず、試行錯誤の連続でした。諦めかけた中、失敗と思い放置した桜が元気に育っているのを発見。



濃度を調べると 100ppm ということが分かりま

した。再試験の結果、最適濃度であると判明し、高温乾燥に耐える条件を遂に見つけました。検証として、海沿いの土をビーカーに入れ、桜を植えて試験を行いました。2週間にわたり水を与えず、高温乾燥状態にすると、対照区は全て枯れますが、酢酸区は生存率 100%という驚くべき結果です。さらに、圃場での試験では、定植から1ヶ月後、対照区の生存率 68.8%に比べ、酢酸区は 100%を記録。葉も、対照区では高温障害が発生しているのに対し、酢酸区は青々と健全な状態です。以上から、再現性を獲得し、酢酸は桜に高温乾燥耐性を与えることが分かりました。

これだけではありません。これまでは使い捨てカイロから二価鉄イオンを抽出するためにクエン酸を使っていましたが、クエン酸から酢酸に変えても、二価鉄イオン濃度は 1,020ppm と同等の数値です。酢酸でも発根促進効果が十分に得られると考えました。測定の結果、酢酸区は対照区に対して3倍の根の長さを確認。これまでクエン酸と使い捨てカイロを使い発根促進剤を作ってきましたが、酢酸に置き換えれば、高温、乾燥、塩害の3つの環境耐性効果を同時に引き出せます。この発想を基にした資材は、世界に1つもありません。試験管で作ると、偶然桜色に発色。こちらが酢酸を用いた新資材の「桜色活力剤」です。



外部評価として、京都大学の松下名誉教授に結果を伝えると、「猛暑に耐えて、沿岸部の桜も守れる」と認めていただき、地域普及に期待を持ってくれました。



4.地域振興

桜色活力剤を使用した植樹を行い、地域への普及活動に取り組み続けてきました。すると、地元の子供達から「植樹の仕方を教えてほしい」と依頼が来たのです。昨年11月から計6箇所において、545名と桜色活力剤を使用した植樹を行いました。この活動が新聞に取り上げられると、塩竈市桂島の方から「桜の植樹がうまくいかない」と相談を受けたのです。現地に行くと、高温、乾燥、塩害の影響で植樹した桜が枯れていました。すぐに桜色活力剤を使い植樹を行うと、枯れていた場所に苗木が定着。島民の方から「ここに桜が咲くなんて」と植樹成功の喜びの声をいただきました。



これまでの成果として、半年間で26本の植樹を行い、現在も枯れていません。自信を得た私たちは、柴田町役場に赴き桜色活力剤の散水を提案しました。すると、佐藤さん、町民、樹木医、町役場全体で取り組むことが決定。当日は多くの町民が活動に参加し、桜色活力剤を散水しました。



佐藤さんからは「桜の未来を繋げてくれてありがとう」と言葉をいただき、私たちが地域の宝で

ある桜を守る力になったのです。現在、柴田町の桜に、塩害はもちろん、高温障害の被害は全く出ていません。これまでに1,076本の植樹を実施。2,000本を目標に、地元を桜色に染めていきます。桜を見た方にアンケート調査をすると、「この桜は地元の癒しになる」との声が寄せられ、研究が確実に地域振興に繋がっていると実感しました。以上、猛暑に負けない桜色活力剤を開発することで、仮説を立証し、桜を守ることで地域振興を実現しました。

5.応用普及

厳しい環境下でも育つ桜は、またたく間に口コミで広まり、活動を知ったJICAの西岡さんから、「桜色活力剤を世界に広めてほしい」と依頼が来たのです。JICA筑波では、5カ国の代表者とともに桜を植樹。どの国も高温、乾燥、塩害に悩んでいるため、データや成果を伝えると、「是非母国でも使いたい」と熱望され、作り方から使い方まで全て共有しました。さらに、地元の桜の素晴らしさや想いを伝えると、「母国でも桜を植えて花見をしたい」と言っていただき、JICAに桜を提供。「地域を桜で笑顔にしたい」と始まった活動が、世界へと羽ばたく一歩となったのです。



今年度だけでメディア出演は30件を超え「桜の名所、農高生と守る」と取り上げられました。この実績から「桜色活力剤」と検索すると、AIによって研究の成果が表示され、広く社会の注目を集めていることが分かります。私たちの研究は地域を超え世界を守る研究へと発展したのです。

6.まとめ

①猛暑に負けない活力剤を開発し、桜の名所を守りました。

②桜を守る技術を、地域、世界へ普及しました。

今後の課題は、効果検証の継続と、製品化に向けた整備です。

この研究は地域振興として認められ、ボランティアの全国大会において、最優秀賞の文部科学大臣賞を受賞。大阪・関西万博での研究発表も行い、全世界へ発信。これを聞いた小泉純一郎元内閣総理大臣からは、「地域の未来を変える活動だ」と評価をいただきました。私たちが目指すもの。満開の桜の下で、人々が笑いあえる新たな時代。それは、桜色の未来です。

桜で笑顔が生まれる地域を目指して、これからも研究を続けていきます。



以上で、私たち宮城県農業高等学校 桜プロジェクトの活動紹介を終了とさせていただきます。皆様、ご清聴いただき、誠にありがとうございました。

【質疑応答】

Q. 製品化や海外展開を見据えているとのことでしたが、製造コストはどの程度かかるのでしょうか。

A. 一度に2リットルを製造していますが、その原価は320円です。成木1本あたりの植樹に必要な量は16ミリリットルですので、2リットルで125本分に使用できる計算になります。これをコストに換算すると、成木1本あたり約2.56円と非常に安価に抑えることが可能です。

Q. 活力剤を与えるタイミングや頻度について教えてください。

A. 基本的には、植樹の際の水極め（みずぎめ）の作業時に、水と一緒に散布します。頻度に関しましては、この桜色活力剤の使われている酢酸というのは、細胞にメモリー化させるという能力があります。なので、この桜色活力剤を1回与えれば、植物がその効果を記憶し、1回与えるだけで、それが永久に続くような活力剤になります。

Q. 桜以外への応用、例えば猛暑に弱い野菜などへの使用は可能でしょうか。

A. 結論から申しますと、可能です。酢酸による高温乾燥耐性の付与は、光合成を行う独立栄養生物であれば共通して作用する機能です。そのため、まだ実証実験は行っておりませんが、桜以外の植物にも応用できると考えています。



開会挨拶

公益社団法人国土緑化推進機構 常務理事
今泉 裕治



宮城県農業高等学校の皆さん、司会進行、そして素晴らしいオープニングアクト、ありがとうございました。世界に誇れる素晴らしい成果を聞かせていただきまして、この育林交流集会のオープニングにふさわしい発表だったと思います。

本日、育林交流集会の開会にあたりまして、ご挨拶を申し上げます。

初めに、本年、岩手県大船渡市、岡山県岡山市、愛媛県今治市などで発生した山火事の被災者の皆様に対しまして、心からお見舞いを申し上げます。また、被災した森林の復旧と、被災者の生活再建にご尽力されている関係者の皆様に対し、深く敬意を表する次第でございます。当機構におきましても、地震、気象災害、山火事への支援に、用途を限定した「緑の募金」を呼びかけており、今後もこれらの浄財を活用し被災地の森林復旧と生活再建の一助となればと考えております。

さて、本日は豊かな自然と歴史、文化、産業、そして温かな人の心が調和した、魅力あふれる街、ここ宮城県名取市において、第48回全国育樹祭の併催行事として「育林交流集会」を盛大に開催できますこと、厚く御礼申し上げます。また、ご来賓の林野庁研究指導課長の松本様、全国林業改良普及協会専務理事の中山様、地元名取市長山田様には、ご多用の中ご臨席を賜り誠にあり

がとございます。

さらに本日、森林を守り育て、木と親しみ、活かす、そうした取組の事例をご紹介します。プレゼンターの福田様、齋藤様、吉田様、そしてコーディネーターの長野様には、開催への多大なるご協力をいただき深く感謝申し上げます。

戦後の荒廃した国土に緑を回復するため、昭和25年に国土緑化運動が始まり、その後、継続して森を守り育てることの大切さを普及啓発するため全国育樹祭の開催等を通じた継続的な活動により、緑の国土が蘇りました。

また、平成23年の東日本大震災によって、名取市を含め、東北地方から関東地方に至る広い地域で、大きな被害を受けた海岸防災林につきましても、官民を挙げた再生の努力が重ねられ、豊かな森林が蘇りつつあります。

今後は、これまでに育てられた森を活かし、持続的にその恵みを享受するとともに、そうした営みを通じて地域全体の力を高めていくことが重要です。

本日のテーマ「地域と紡ぐ森林づくり、次世代へ伝えるメッセージ」の下で発表される具体的な取組事例が、ご参集の皆様の森林づくりや木材利用への関心を一層高める契機となることを期待しております。

結びに、本日の開催にご尽力いただきました名取市をはじめとする関係者の皆様にご心より御礼を申し上げ、主催者の挨拶とさせていただきます。

来賓挨拶

林野庁 森林整備部 研究指導課長
松本 純治



皆様、こんにちは。林野庁 森林整備部 研究指導課長の松本でございます。本日ここに第48回全国育樹祭の併催行事であります育林交流集会の開催にあたりまして、一言ご挨拶申し上げます。

本日ご参集いただいた皆様におかれまして、日頃より各地域の森林、林業、木材産業の発展にご尽力をいただいておりますことに厚く御礼を申し上げます。併せて、主催の宮城県様、公益社団法人国土緑化推進機構様をはじめとする関係者の皆様のご尽力に対しまして、深く敬意を表します。

さて、我が国の森林資源は、戦後の大規模な造林と、長年にわたる関係者の皆様のたゆまぬ努力によりまして、本格的な利用期を迎えております。「伐って、使って、植えて、育てる」という、森林資源の循環利用のサイクルを確立し、地域の林業、木材産業の活性化と、2050年ネットゼロの実現に貢献をしていくことが重要です。

森林資源の循環利用を進めるためには、森林を適切に管理していく必要があります。他方、森林所有者の高齢化や世代交代により、山への関心が薄れ、境界が不明確になるなどといった課題もございます。このため、本年5月に、森林経営管理法を改正し、地域の関係者が森林の将来像を共有し、経営管理の集積化、集約化を進める新たな取組を導入いたしました。森林所有者、森林組合、

林業事業者等、皆様にこの仕組みを活用いただき、手を取り合って地域の森林を管理、経営いただくことで、健全な森林が次の世代に引き継がれていくものと考えております。

今回の育林交流集会のテーマは「地域と紡ぐ森林づくり、次世代へ伝えるメッセージ」です。オープニングで、宮城県農業高等学校の皆様から発表いただいた「桜プロジェクト」は、単なる課題に対する研究の開発にとどまらず、それを地域で実践をし、さらに世界にも貢献をするということで、まさに今回のテーマにもふさわしい、素晴らしい取組だったと思います。

また、この後、株式会社モリアゲの長野様の進行のもと、福田様による日本産漆の生産技術を未来に繋ぐ技術。齋藤様の木材と木造建築の可能性や魅力に関するお話。吉田様の名取市における海岸林再生プロジェクトの取組といった各方面で、地域の森林資源を次世代に繋ごうと活動されている皆様の事例発表が予定されており、大変楽しみにしております。

この集会での交流を通じて、本日ご参集の皆様による、それぞれの地域での森林づくりの取組が、ますます活発になっていくことを期待しております。

最後になりましたが、名取市をはじめとする関係者の皆様と、本日ご参集の皆様のますますのご発展、ご健勝を祈念いたしまして、御礼の言葉とさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。



一般社団法人
全国林業改良普及協会 専務理事
中山 聡



全国林業改良普及協会の中山と申します。私どもの団体は、林業関係の月刊誌を出版しております、『現代林業』や『林業新知識』と林業、森林に関する情報をご提供させていただく団体でございます。

今回の育林交流集会の開催にあたりまして、一言ご挨拶を申し上げたいと思います。第48回全国育樹祭の併催行事である、育林交流集会在、宮城県名取市におきまして、このようにたくさんの皆様方ご参加のもと、盛大に開催されましたこと、心からお慶びを申し上げます。

初めに、東日本大震災から14年目を迎える中、計り知れない悲しみと困難を乗り越え、次世代のために海岸防災林の復旧・再生に尽力された多くの皆様に、深く敬意を表します。

さて、地球規模での森林減少と温暖化が懸念される一方、わが国では戦後の造林により国土の3分の2が森林に覆われ、その人工林の半数が本格的な利用期を迎えています。木材として利用できる森につきましては、伐採を行い木材として利用し、若い苗木を植え、新しい森林づくり、森の若返りを図っていくことが必要となっております。これによって、森が成長していき、二酸化炭素の吸収が図られ、森林が地球温暖化問題に対して大きな貢献ができるということもございます。そしてさらに、その際に、花粉の少ない苗木を使うこ

とによりまして、花粉症対策にもなるというようなことでございます。そのためには、主伐・再造林を地域の実情に合わせ、適切に進めていくことが望まれます。

本日のテーマ「地域と紡ぐ森林づくり」は、森が地域にあり、地域が主体的に森林づくりに関わることの重要性を示すものであり、まさに時宜を得た素晴らしいテーマであると感じております。

ここ2、3年、夏場の温度が非常に上がってきておりまして、熱中症でお亡くなりになられる方までいる状況でございます。テレビでもよく氷河が溶けているというようなことをご覧になっている方もおられると思いますけども、地球温暖化の影響が目に見える形で出てきております。多くの一般の方々、森は二酸化炭素を吸収するということをご存知ですので、森林がそういう役割を果たすことに対して、大きな期待を持っておられると考えますと、今日の育林交流集会のこの意義は、非常に大きいと思っております。

最後でございますが、今日の育林交流集会のテーマが、宮城県のみならず全国に広がっていくことを祈念申し上げつつ、また本日ご参集の皆様の益々のご発展、ご健勝を祈念いたしまして、応援の言葉とさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。

歓迎の言葉

名取市長
山田 司郎



只今ご紹介いただきました、地元名取市の市長の山田でございます。

本日は、第48回全国育樹祭併催行事であります育林交流会が、ここ名取市文化会館で開催されますこと、本当にありがたく、おめでとうございます。市民を代表して皆様のご来訪を歓迎申し上げます。本日お集まりの皆様方には日頃から育林活動の推進に多大なるご尽力をいただいておりますことに、心から敬意と感謝を申し上げます。

さて、名取市の沿岸部における海岸防災林は、2011年の東日本大震災により、壊滅的な被害を受けました。その後の再生復興事業には、クロマツ苗木の育成から始まり、植林、除伐、間伐、調整伐、保育事業に至るまで、地元の皆様をはじめ、県内外の数多くの方々にボランティア活動を通してご協力を賜ったところでございます。この植林の取組は、2020年には概ね完了しているところで、この間のご協力に対しまして、改めて深く感謝を申し上げます。

海岸林の再生には、息の長い取組が必要であり、今後も地元の皆様や関係機関との連携を図りながら、震災前の白砂青松の松林を取り戻すことができるよう尽力してまいりたいと考えております。

また、名取市の西部側には多くの森林を抱えて

おり、森林環境の整備はもとより、より良い環境を目指し、森林関係者の皆様と連携して、美しい里山環境の形成に取り組んでまいりたいと考えております。

本日の育林交流集会は、「地域と紡ぐ森林づくり」をテーマにして、森林づくりや木材利活用、震災の伝承等の様々な分野での事例発表と、パネルディスカッションが行われると伺っているところです。

話は変わりますが、今年の名取市のテーマを、漢字一文字で表すと「育（いく）」、育てるという字であります。これまで種蒔きをしてきた様々な事業が、花開き、実を結んで、次の世代に種として残していけるような、そんな意味も込めて、子育て、教育、夢を育む、そして今回の育林などというようなことに用いられる言葉です。この「育む」という言葉は、親鳥が雛を守り育てる、子が養い育てるという意味の他に、大事に守って発展させる、といったような意味があるようでございます。

本日の育林交流集会を通じて、森林の持つ多様性や保全、地域の森林づくりについてじっくりと考え、育てる機会になることをご期待申し上げます。

結びになりますが、全国育樹祭のご成功と、本日の育林交流集会が実り多いものとなるようご期待申し上げますとともに、本日ご参加の皆様方のご健勝をご祈念申し上げまして、私の歓迎の挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。



事例発表

コーディネーター



長野 麻子

株式会社モリアゲ 代表取締役

愛知県出身。東京大学文学部フランス文学科卒。

1994年に農林水産省に入省。2018年から3年間林野庁木材利用課長として「ウッド・チェンジ」を各地で叫び続ける。豊かな森を次代につなぐことを天命と感じ、2022年6月に早期退職。同年8月に日本の森を盛り上げる株式会社モリアゲを設立し、各地の森をモリアゲ中。

プレゼンター 事例①「日本産漆で文化財を未来につなぐ」



福田 達胤

株式会社小西美術工藝社 副社長兼二戸支社長

青森県出身。岩手大学農学部卒。

林野庁東北森林管理局で勤務後、創業寛永年間の業界最大手の小西美術工藝社に入社。2015年に文化庁の「国指定文化財建造物保存修理での原則国産漆使用」の通知を契機に、漆産地の発展と持続に貢献すべく、翌年10月に漆生産部門である二戸支社を立ち上げる。漆生産全国1位の二戸市でウルシ林の造成から漆掻きまで、修復工事で使用する漆の一貫生産を行う。

小西美術工藝社の福田です。お隣の岩手県から参りました。

本日は全国育樹祭、そして育林交流集会の開催、おめでとうございます。皆様の前でこのようにお話ができる機会を頂戴して、大変ありがたく思っております。

小西美術工藝社は、神社仏閣などの文化財の、装飾保存修理の施工業者です。宮大工さんや屋根屋さんなどと連携しながら、建物の漆¹塗り、彩色、飾り金具の修復を職人が行っています。

日光東照宮を造営した三代将軍家光公の時代から始まり、現在は業界の技術者の4分の1が小西美術の職人です。



今日お話しする「漆」に関して言えば、日本産漆を全国で一番多く、積極的に使っている会社です。文化庁は平成27年に、国庫補助による国宝・重要文化財建造物の保存修理には、原則として日本産漆を使用するという通知を各都道府県に



発出しました。このことで、日本産漆の需要が高まり、この10年で増産が進んでいます。

小西美術の施工実績数は、創業以降280件以上になります。長い歴史の中で、同一の文化財を繰り返し手がけさせていただくことも多いです。建物の漆塗りと彩色は、安土桃山時代以降の神社仏閣に多く見られます。宮城県内でも多く施工させていただいています。

国宝である大崎八幡宮などにおけるその役割は、木部本体から雨風を防ぐこと、そして、神秘性・荘厳性の表現によって人を惹きつけること、この2つに大きく分けられます。日本は雨が多く、湿度が高い気候ですから、定期的な保存修理が必ず必要です。漆がないと修復ができず、文化財は朽ちてしまいます。他の塗料で塗り直してしまうと、技術が途絶えてしまい、日本文化では無くなってしまいます。



改めて、漆の特徴を並べました。皆さんご存知の通り、液体に触るとかぶれるということはありますが、一度固まると濃硝酸とか濃硫酸に漬けても溶けない、自然界最強の塗膜になります。固まるためには、一定の温湿度が必要です。唯一の弱点は紫外線なのですが、日に当たらなければ、縄文時代の遺跡から綺麗な状態で発掘されるほどの耐久性があります。

ウルシ²の木は、中国・ヒマラヤが原産です。植生分布は日本、韓国、中国で、日本では栽培されています。漆の採取作業を「漆掻き」と言います。立木に専用の刃物で傷をつけて、師部樹液である漆を掻き取る作業です。その様子は、江戸時

代中期に資料にも残っています。岩手では、苗木を植栽して15年ほどで、掻き取りができる太さになります。葉っぱが出ている6月から10月末までのワンシーズン限りの掻き取りで、一人前の職人は200本の木から、約50キロの漆を採ります。1本あたりに換算すると、わずか250グラム程度です。採った後は、根からの萌芽更新を促すために、速やかに伐採してしまいます。ただ、萌芽更新が盛んですから、それを仕立てると、約10年後に再び掻けるまでの太さに成長します。過去には、倒してその剥がした皮を絞り出して漆を採れないだろうかっていう研究があったのですが、失敗に終わっています。牛からミルク、鶏から卵をいただくように、生きている木から漆を頂戴するというのが本質です。それでは、実際の漆掻きの映像をご覧ください。



これは、9月の前半、最盛期の映像です。まず、鎌という刃物を使って、外樹皮を削っています。表面を一旦平滑にしています。この独特な形状の刃物は、専門の鍛冶職人が作っています。その後は、カンナに持ち替えて、前回つけた傷の横に、ちょっとだけ長い傷をつけます。

そして反対側の尖ったところを使い、メサシで確実に漆が出るところを切断しています。これ、映像ではちょっと省略していますが、1本の木に、逆三角形の形の傷が、9つほどあって、その全てに4日に一度傷をつけています。そうするとすぐに漆が出てきます。ヘラに持ち替えて、左手のタカップと呼ばれる容器で受け止めています。



白いですね。漆本来の色は、乳白色なんです。空気に触れて、酸化していくと、だんだんとこのタカッポの中でカフェオレ色になっていくのが分かるかと思います。ちなみにこのタカッポは、ホオノキの皮を剥いで、底板を当てて作ったものです。

数字を見ていきましょう。国内生産量と自給率の推移を示したグラフになります。文化庁の通知があった平成27年から増産されて、令和2年には2トンを超えましたが、去年は全国で1,792キロでした。このうちの8割が岩手県で生産されています。自給率にすると5.7%で、裏を返せば、日本で消費されている95%は輸入品になります。



岩手県産は全て、県北の二戸地域で生産されていて、非常に地域性が高い産品です。旧町名を冠して「浄法寺漆」と呼ばれています。ちなみにですが、この浄法寺町の漆沢という集落には、漆田さんという漆掻きの方がいます。この二戸市に、小西美術では、文化庁通知の翌年、平成28年10月に、漆生産部門である二戸支社を設立しました。文化財の修復にとって、漆の供給というのは生命線です。私は立ち上げの要員として入社し

て、9年間責任者を務めています。苗木の生産から、植栽、栽培、漆掻きまで、全国初の一貫生産を目指してスタートしました。二戸支社の事業の1つ目が、ウルシ林造成です。苗木生産から行っております。小西美術では、コンテナ方式を採用して苗を育てています。畑だと通常2年かかるところを、コンテナの1年生苗の出荷を実現して、かつ裸苗より価格を抑えて生産できるようになりました。令和元年に初めて230本を植栽してから、今年の春までに1万7,000本を、お借りした遊休農地で栽培しています。ウルシは木材以外の用途に使用される特用樹にあたります。農業委員会の指導のもと、関係法令に則り、農地でウルシを育てています。農地利用の最大のメリットは、車両型の刈払機が使えることです。



右端の写真は、最初に植栽した、現在7年生のウルシ林です。成長が良く、あと4年で漆掻きができる勢いで育っています。という風にお話すると、すごい順調なように聞こえるのですが、ウルシの一斉造林というのは、林業とは別の難しさがあり、これまで数々の困難と失敗を経験してきました。ウルシは水はけが良く、ある程度の表土の厚さがないと良好に育ちません。山地の尾根部分では雑木に負けてしまいます。また、植栽から数年間は、病虫獣害対策を、手厚く行わなければ、成長が止まって、やがて跡形もなく消えてしまう事例が、全国でも数多く報告されています。我々も失敗を糧に、考えて、実践して、克服している最中です。



次は人の話です。もう1個重要なのは、漆掻き職人の育成です。漆掻きという仕事は、葉っぱが出てくるまでの間、春から秋までの季節仕事なので、冬場の仕事がないというのが、これまでの若手の定着の課題でした。現在でも、地元の漆掻きの大半が個人事業主の方で、漆を出荷するまでは収入がなく、万が一の怪我の際でも保障がありません。そこで小西美術では、熱意ある若い人が就業しやすいように、通年で漆に携われる勤務体系を構築して、正社員雇用を行いました。20代から30代の男女5名が、未経験から研鑽を積んでいます。8年間で1.3トンの漆を出荷してきました。旧態依然とした業界で、史上初の企業による漆掻きですから、当初はかなり警戒されました。当然のことです。信頼を得るためには、生産量とそのため技術を着実に伸ばしていくほかありませんので、時に躓きながら、みんなで教え合って技術を磨いてきました。その結果、漆の品評会で、令和4年と昨年に、当社職人が金賞をいただくことができました。漆生産部門の仕事を、SNSで大胆に公開しています。漆は、数ある自然素材の1つではありますが、その生産工程自体に高い文化的価値があるのではないかと、私は考えています。技術の流出を恐れずに、このように公開しているのは、映えない、地味な仕事の蓄積こそが技術の核心で、一番大事なところはカメラには映らないと思っているからです。社員を見ていて面白いのは、入社2、3年目になると欲が出てくるんです。自分で思いついた方法を試してみても、でも結局は、さらに経験を重ねると、伝統的

な方法に回帰して、その核心部分を掴むようです。コアとなる漆掻きの伝統技術は変えずに、そのまま継承する。一方で、それを支える造林技術や雇用形態、情報発信などは、時代に最適な方法に変化させていくというのが私の信条です。

余談ですが、ある年度末の日に、経営者の方と思われるフォロワーさんから、こんなメッセージをいただきました。



「明日から新入社員を受け入れしていきますが、ウルシの栽培を拝見していると、言葉が通じる分だけ、新人を育てる方が楽やなと思っしまいます」と。私からはですね、「逆に、いきなり辞めたりしないし、手をかけた分だけ確実に木は育ってくれるので、いいなと思っしまいます」と。何事でもそうですけれども、私も2児の父ですが、育てるって忍耐力が必要ですよ。私、紙に大きな字で「忍耐、忍耐」って書いて、事務室の壁に貼って、自分に言い聞かせながら仕事をしています。二戸の地域というのは、名実ともに日本一の漆の産地ですが、これは地元の方々と、行政の何十年、それ以上にわたる、長い取組がありました。市では、全国で唯一、漆の振興を専門とする「漆の里づくり推進課」があり、今や市政の目玉の1つとなっています。今年で創設50周年となる、岩手県浄法寺漆生産組合は、低迷期は高齢者15名しかいなかった職人が、今や老若男女40名まで増えました。令和2年には、漆掻きが木造建造物を受け継ぐための伝統技術の1つとして、ユネスコ無形文化遺産に登録。また、日本遺産にも登録されています。70代の職人の方は



「漆が売れずに農業をやりながらなんとか続けた時期もあったが、先人が繋いできた技術が認められて嬉しい」と、当時の新聞にコメントしています。そして、小西美術も地域の一員として働いています。先ほどの漆の生産組合には、法人会員として所属して、職人同士の勉強会や品評会に参加しています。

また、二戸市との連携協定に基づき、統廃合で使われなくなった旧御返地中学校1階を、二戸支社として使わせていただいております。その他にも、眠っている地域資源の活用を進め、事業での見学や大学との研究に積極的に取り組んでいます。さて、伐採した枝から漆を採る「瀬鉈搔き」という手法があります。40年以上前に途絶えた技術です。江戸時代に、日光東照宮の金箔押しに使われていたと文献が見つかり、日光の技術者からの依頼を受け、小西美術では一昨年から復活させています。

伐採後に切り揃えて束ねた枝を、沢の水に2週間程度漬けます。この年はちょうど、その漬けている間に雪が積もってしまいましたが、その枝を引き上げて、屋内に運びます。採取作業は、暖房の効いた屋内で行います。台に置いて、菜切り包丁で傷をつけて、立てかけると、ごくごく少量の漆が滲み出てきます。80センチの枝から0.5グラムほどしか採れません。手間の割にごく僅かしか採れないことから、この瀬鉈搔きは80年代には途絶えたと見られ、どの浄法寺の漆搔き職人でも経験がありませんでした。小西美術では、文献や他の産地の記録映像を参考に、道具も再現して、工夫を加えて、100グラムの「幻の漆」を復活させました。



最後のスライドになります。これ、たまたまなのですが、小西美術工藝社の社名は、旧字体の「藝」の字が使われています。この草冠の下の黒い部分は原字で「うえる」と読みます。芸術とかアートの意味でよく使われる「藝」ですが、この中央の甲骨文字の通り、人が若木を持っている姿が起源となっています。その本来の意味は、「種を蒔く、草木を植える」だそうです。我々は、全ての漆工、漆芸は、ウルシを植えて育てることから始まると考えています。今日の話はどうしても、大きなスケールの話になるのですが、本当は目の前の1本の木と、人間1対1の関係だと思っています。1本1本同じ木はありません。全く違う木です1本1本。どんな木でもいいので、庭先に1本植えて、手入れを続けていくと、非常に彼らから多くのことを教わります。土のことであるとか、天候のことであるとか、様々なことを教わります。

本日お集まりの皆様とともに、未来に向けて文化を守り、森を育てる仕事を、これからも地域の一員として紡いでいきます。

ご清聴ありがとうございました。

※1. 漆(漢字)：ウルシの樹液、または、それを精製した塗料を指す。

※2. ウルシ(カタカナ)：植物としてのウルシの木を指す。



【質疑応答】

Q. 文化庁の通知以降増加していた漆の生産量が、令和 2、3 年頃をピークに減少・横ばい傾向にある理由は？

A. 質問ありがとうございます。気候ですね。夏が暑すぎる、乾燥が強いというところが、特に、ここ 3、4 年影響が出ています。岩手の県北でも、最高気温 35 度を超える日があります。漆が出るのは、実は 1 日のうちで早朝の、まだ日が昇らない時間帯なんです。朝の 5 時とかから始まって、大体 9 時～10 時、30 度になるまでの時間帯がよく採れます。そうすると、暑い時間が続いてしまうと、どうしてもその採取量に影響が出てしまいます。

Q. 漆掻きは決まった箇所からしか採れないのか？枝先などからも採れるのか？

A. 基本的には、木のどこを傷つけても漆は出るんです。苗木をパキッと折っても、葉っぱを千切っても、漆は出るんですね。ただ、今の「逆三角形の傷を互い違いにつける」という方法は、先人たちが 100 年以上かけて観察と失敗を繰り返し、最も効率よく採取するために編み出した技術なんです。



プレゼンター 事例②「木材の可能性と魅力」



齋藤 健太郎

公益社団法人日本建築家協会(JIA) 宮城地域会長

宮城県出身。八戸工業大学卒。

民間の建築事務所を経て、2005年に有限会社ガルボ空間工房を設立。

2023年からJIA東北支部宮城地域会長を務め、建築見学会・サロン・ツアーの開催による技術普及のほか、木育や学生コンペの開催など若手育成にも積極的に取り組む。

本日はこのような貴重なイベントにお招きいただきまして、ありがとうございます。本日のテーマは、「木材の可能性と魅力」ということで、宮城県 CLT 等普及推進協議会発足から約9年にわたる活動内容と、私の本業であります設計事務所としての活動をご紹介しますと思います。

そもそも建築家協会とは何者なのかを、簡単に説明させてください。建築家の集まった公益社団法人ですので、建築家としての知識と技術を発揮して、豊かな地域、文化、風土、環境の創造実現に向けて、日々全国で活動しております。

1年を通して様々な活動を行っていますが、宮城地域会での活動も説明させて下さい。大きいイベントの一つである「アーキテクツウィーク」を毎年せんだいメディアテーク1階にて行っています。東北の建築家のパネル展、仙台城パネル展、子ども達との折り紙建築ワークショップや、木育ワークショップなどを行います。シンポジウム「伊達の城」や、建築家「堀部安嗣氏」の講演会、メーカーなどの技術セミナー、台南建築の報告会も行います。

その他私たちは、行政との意見交換や、街づくり、空き家・空き地相談、災害対策の支援を行っており、昨年からは国際交流として、台湾にある台南市の建築家との国際交流も行っております。また、建築だけではなく、趣味の交流も行っております。みんなで山を登ったりとか、釣りをしたり、ゴルフをしたり、自然と遊ぶことも大事にし

ている団体であります。



こちらの資料の上の方が、台湾の建築家の方々。先日は100名ほど来られたんですけども、そこで交流会などを行ったり、台湾に私たちも行って交流したりしております。

ここからは、宮城県の CLT 等普及推進協議会の取組についてご説明いたします。建築家協会の活動の中で、CLT 等普及推進協議会から宮城県の当協議会に参加しませんかと声がかかり、発足当初より参加させていただいております。

宮城県 CLT 等普及推進協議会は何をやってきたのか、設計側をメインに全体的にご説明させていただきます。はじめに、設立趣旨を読ませていただきます。

木造建築に利用される木材は、森林が吸収した二酸化炭素を炭素として固定し、地球温暖化対策の一翼を担います。また木材は、森林の伐採後、再び植林することで、再造林可能な資源でもあります。これらの豊かな資源を背景に、より多くの



宮城県産材の利用を進め、地球温暖化対策の推進や、地域産業活性化を図る必要があります。

宮城県内で製造される CLT、LVL などは、新たな建築資材として、特に非住宅分野で、木材需要拡大に大きく寄与することが期待されていることから、木造建築に関わる産業の連携を促進し、CLT や県産材の普及と、地域産業の活性化、地域産業化を目的として、宮城県 CLT 等普及推進協議会が設立されました。

協議会が設立されて、はじめは何をやっているかわからないというのがあり、まずはみんなで分野を分けながら、10年間のロードマップを作成しました。CLT など木材を知ることから始まり、使い方、法規制を学び、小さいものから大きいものへと、実際に作っていく流れになります。

つぎに CLT 協議会のパンフレットが非常に分かりやすいので、こちらで説明させていただきます。木を育て、木を加工し、木で発想し、木で創る。川上から川下へ、産学官連携して、オールみやぎの木で創るという構想です。宮城の資源を宮城で活用し、地域を活性化する。公共性のある建築は、もっとエコフレンドリーへ。木を使った建築は、人の暮らしや精神に優しい。美しく価値ある建築は、次世代への資産になります。



グロー（GROW）。宮城の充実した森林資源を管理しながら、資源化します。防災にも役立ちます。

メイク（MAKE）。木造、木材の特性を活かして、住宅の部材や製材、CLT、LVL、合板などの

建材に加工していきます。内装の木質化や、木の家具や建具にもなっていきます。

デザイン（DESIGN）。協議会の設計事務所や、大学が中心となりまして、宮城県内の CLT や LVL など、木材を利用した公共建築の検討を行いました。タスクフォース形式や、コンペ形式、あとワークショップ形式などです。

ビルド（BUILD）。実際に建てる、材料の生産から、加工、建設まで、協議会会員、企業が産学官連携して、公共建築の施工について研究しました。その他国内外の先進視察を行い、協議会で共有し、現在に至ります。

協議会では様々な検証を行ってきました。加工や流通や検証、接合方法や金物の開発、商品開発などです。その中で私が主に行ったスギ材活用の検証について簡単にご説明いたします。

まずは、杜の都に森を建てるという検証を行いました。森を育てて木を使う。街の中に、鉄骨や鉄筋の建物だけではなく、温もりを感じる木を使った中層の建築を建てられないかという計画です。私たちが最初に計画し検証したのが、4階建ての事務所ビル・集合住宅です。普及しやすい規模を想定しました。



左側が事務所ビル。右側が集合住宅、4階建てですね。事務所ビルの方は、鉄骨のフレームに対して、CLTの耐震ブレースを設置しております。集合住宅は、梁のフレームを鉄骨として、その他の壁、床、柱を、CLTを使用した検証です。中高、中層の建物で普及しやすいのではないかと考



えました。軽くて強い環境に優しいCLTを、長所を生かして、CLTと鉄骨のハイブリッドとして使う。適材適所でCLTやLVLなどを使っていくという考え方です。これを標準化、ユニット化することにより、地元の設計事務所や工務店でも、設計や施工ができて、木造化することができるのではないかと考えました。

2つ目のスギ材検証についてです。こちらは、先ほどのビル系ではなく、もう少し小型の普及しやすいものがないかという検証を行いました。宮城県内で製造するCLTやLVL、超厚合板の最大製造寸法を生かした、構造躯体を標準化して、中小規模の店舗、事務所、コンビニ等で求められる普及型ユニット建築を開発しました。これにより、地域の工務店でも容易に建設可能な建築システムを実現いたします。また、同材を使用して、一般家庭から公共施設等へも利用可能なリノベ・DIY商品や、シェルター機能のある組み立て式の家具を開発しました。普及型ユニット建築は、県産スギ材の製造寸法、最大寸法でユニット化して、既製金物で接合することにより、加工手間の少ない省力化で、工期が短縮できるのではないかと考えました。

また参考プランを作成して、1ユニット空間でも小規模な店舗や事務所として機能することが分かりました。今後は、もう少し具体的に電気や設備などパッケージ化して、災害時にも、仮設住宅と対応も検討、あと製造から建設までのコスト検証を行い、実現に向けて、設計開発を進めてまいります。

構造の検証も行っております。構造は、ユニット建築にふさわしい施工の省力化、経済性を主眼として、木材の複雑な加工は避け、接合金物も極力既製品を使用して、施工性の良い構造としました。リノベ・DIY商品では、今後増えていくであろう既存空間を利用して、リノベーション用品としてCLTなどを利用した、室内防音室の検討、設計を行いました。また、トレーラーハウスや

キッチンカーは、トイレや厨房設備を備えて、移動できる自動車型のユニット建築として基本設計しております。平時はイベント出店、屋外の店舗として利用して、災害時には、簡易的な避難所にも活用可能であると考え計画しました。お子様のいる方に向けて、多発する地震・自然災害に対して、少しでも安心が得られるように、シェルター機能を持ったDIY家具の開発ということで、2段階ベッドや小屋遊具という、災害が起きた時に、子供がすぐ入って、古い家でも子供の落下物から身を守るというふうな構造にしております。

私たち協議会メンバーは、小さなものでも日々検証しています。設計でも材料でも、施工のことも小さなものでも、協議会にご相談ください。ちなみに設計のスタートは、敷地周辺環境を把握しながら、使い方や用途を確認し、目的を確認しながら、模型・スケッチ・図面などを作って進めていきます。



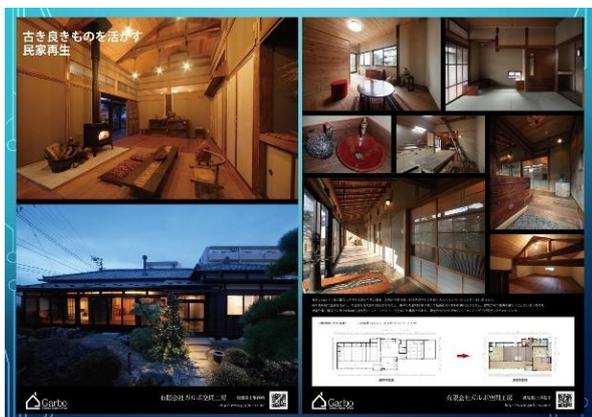
こちらが実際の展示会の様子です。左側が、夢メッセで展示した内容です。LVLを使った花壇、初期の段階ですがCLTでこういったものを実際に作っています。右側がビッグサイトで展示したイベントです。実際に作ってみて不具合とか色々感じながら作り方を効率よく考えていき、来場者の意見を直接聞いて、日々前に進めている段階であります。

ここからは、私の実際に行っている設計の事例を、簡単ですがご説明します。





こちらは、仙台を一望する土壁の家ということで、木造平屋建ての住宅です。外装が実際の田んぼの土を使った土壁。内装は漆喰。床は無垢材。暖房は薪ストーブ。見晴らしの良い自然素材で作られた住宅になります。

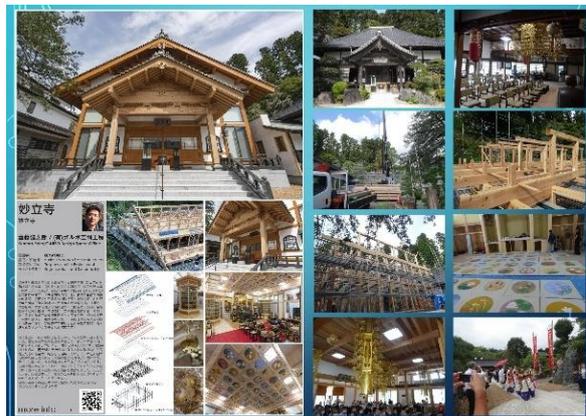


こちらは、古き良きものを活かす民家再生ということで、新築ではなく、先代から受け継いだ古き良きものを大事にしたリノベーションです。こちら天井を取り除いて小屋組が見える開放的な空間となっております。



こちらは私が最初に CLT でやった施設です。

三角屋根部分に、CLT の屋根を形成して、内側からも CLT が直接見えるようにしております。在来工法と組み合わせておりますので、一般の工務店でも作りやすいような工法としております。内部空間も CLT をあらわしとしているので、非常に温もりのある建物となっております。



こちらが、角田にある妙立寺（みょうりゅうじ）というお寺さんです。基本的に木材が 240 角の柱や 300 角の柱なのですが、構造材を敷地内の木から直接取って、製材、乾燥しております。実際の内装材も敷地内の木から取っております。スパンが今回 9 メートル飛んでいるということで、小屋トラスを採用しております。



こちらが森林組合の事務所。構造材、仕上げ、建具、家具と全部宮城県の材料を使っております。事務所スペースが柱をあらわしとして、木造の軸組をダイナミックに見せている空間となっております。会議室の方は、スパンが必要ということなので、張弦梁（ちょうげんばり）を採用した建物となっております。





富谷市の認定こども園です。木造2階建て準耐火で、約1,400平米の建物となっております。こちらも、スパンが飛ぶということで、ツープライのトラスを使った建物となっております。

最後になりますが、今は子ども達を含め、現代の方々は、自然に触れることが非常に少なくなっております。何が自然のもので、何が加工されているのか、区別がつかなくなっていると感じております。食事についても同じと思っております。今後、温暖化が進み、今までに経験のない自然災害についても注意していく必要があると感じてお

ります。山や川、海など自然を学び、活かし、管理しながら、今、自分たちにできることを考えていく必要があると思っております。建築家としては、木材の可能性を学び、建築への使い方を伝えていく。特殊なものではなく、地元の人たちが作れるものを主体としたいと思っております。

また川上から川下への、産学官連携することにより、設計者単独の考え方ではなく、連携する部分は連携し、実践的な設計の取組を心がけていく必要があると思っております。世界、各地の紛争や災害、記録的な物価高など、様々な要素があります。みんなで集まり、コミュニケーションを取りながら、次世代を担う若い人たち、学生や子ども達へ、人材育成を積極的に行い、建築への可能性や魅力を伝え、自然素材の温もりを後世に伝えていきたいと思っております。

駆け足になりましたが、詳しくは、宮城県のCLT協議会のホームページを見ていただければと思います。本日はご清聴ありがとうございました。

【質疑応答】

Q. 現在、宮城県内では木造建築は何階建てくらいまで許可されているのでしょうか？ また、神社仏閣などで「南で育った木は南側に、北で育った木は北側に使う」といった考え方は、現代の建築士にも説明・継承されているのですか？

A. 一般的な建築士が設計できる範囲として、普及しているのは大体3階建てくらいまでです。4階以上になると「耐火建築物」などの特殊な扱いとなり、難しい構造計算が必要になるため、コスト面も含めてハードルが上がってしまいます。

お寺の木材については、私自体詳しく承知してはおりませんが、実際の現場では、地元の木の状態を見極めながら、住職や棟梁（大工の親方）たちと話し合っ「適材適所」に使うことを心がけています。

Q. CLTの普及に向けた体制ができていると伺いましたが、今後さらに拡充・普及していく上で、現在ネックになっている点や、こうなると良いという要望があれば教えてください。

A. 公共建築を手掛ける設計事務所も、ゼネコンさんなど施工側も同様ですが、うちは小規模な設計事務所なので木造に関わる人が多い一方、大成建設さんや竹中工務店さんのような大手は木造に特化している部分があると思います。

しかし、一般的なゼネコンさんだと、「木造にする」と言うとまず嫌がる傾向があります。「やり方が分からない」「使い方が分からない」ということで、コストも高めに設定されてしまいがちです。地元の工務店さんなら「簡単にできるよ」ということでも、ゼネコンさんだと「ちょっと厳しいね」「施工管理が難しい」という話になってしまうことがあります。

そのため、設計者も施工側も含め、建築に関わる人たちの木材に関する知識をもっと増やしていかないといけないと感じています。また、公共建築の打ち合わせにおいても、いまだに「木造イコール燃えるでしょう？」という発想が出てくることがあります。RC造のマンションでも火事になれば燃えますが、内装材や被覆などの対策をしていけば大丈夫だということなど、施主側の理解もまだ不十分なところがあります。そういった誤解を解き、正しい知識を整理して発信していけたらと考えております。

プレゼンター 事例③「最強の海岸防災林を再生する」



吉田 俊通

公益財団法人オイスカ Global Sustainability Mission 担当部長

東京都在住。1994年からオイスカに勤務。2007年から2年間、神奈川の林業会社に勤務し、林業労働者として伐採などの実務に従事。

2009年オイスカに復職し、東日本大震災後に海岸林再生プロジェクトを起案。2020年の植栽完了後も、名取市の海岸防災林約100haの再生を目標に、プロ・ボランティア年間1,500人以上とともに育林を継続中。

オイスカの吉田です。よろしくお願いいたします。駆け足になりますが、ご容赦ください。



この画像は震災前の仙台空港で、奥が名取の海岸林です。これは大変貴重な震災前の海岸林の姿です。震災から1ヶ月後、物資輸送のヘリコプターから状況を確認させていただきました。私には日本の森林史上、最大級の被害に見えました。

私たちの立場は、県が進める「創造的復興」のお手伝いをするという立場です。最大のミッションは現場で結果を出すことです。夢物語ではなく現実的に「最強の海岸防災林」を仕立てるための最短の方法を考えました。ボランティアだけで行う考え方は、最初から一切ありませんでした。

まずは、地元のプロの雇用創出を考えました。寄付金集めには本当に尽力し、基本的に全て自己資金で賄っています。人件費の高騰にも耐え、当初の雇用計画の1.2倍以上の規模で進めています。たくさん働いていただこうと思っています。

2011年3月にこのプロジェクトを立ち上げ、17日には林野庁長官に協力の申し出を行いました。

現在は第2次10カ年計画のど真ん中です。対象地域の面積が多い順に名取市の市有林、県有林、国有林となっており、全長5キロメートル、幅200メートルの大部分をお預かりしています。

私たちは宮城の団体ではなく東京の団体であり国際協力NGOです。だからこそ、オイスカからできる独自の方法があると考えました。宮城全体に必要な苗は600万本と算出しました。その名取での出発点として、地元の被災した農家の方々と一緒に、自分たちで種からクロマツの苗を育てることを選びました。その農家の皆様は、県からの種を払い下げられた時、櫻井さんは泣いていらっしゃいましたね。種まきは本当にお祭りなのですが、この時だけは皆で泣いたという記憶があります。震災から1年、祝い事でも歌わなかったという「さんさ時雨」を勝征さんが歌ってくれたことが、強く印象に残っています。

種まきに失敗したら「佐々木、吉田は市中引き回しの上、^{はりつけ}磔」などと言われましたが、結果として発芽率は95%、植栽後の活着率は99.2%でした。農業の言葉に「苗半作」というものがありますが、良い苗ができれば半分成功したようなものだという意味です。これはクロマツでも同じことが言えます。苗木に勝負をかけていたのです。

「出来っこない」と随分言われましたが、本当に超高品質な苗ができました。全ての苗を育てた名取市沿岸部の北釜や杉ヶ袋南などの皆様は、少しずつお金を貯めて石碑を建てられました。おじ



いさんたちの代のこの石碑は、今でもひっそりと立っていますが、津波でも倒れずにちゃんと残っています。

震災後 10 年の記録として、元日経新聞論説委員の方が、100 人以上にインタビューを行い、ボランティアにも数えきれないほど参加し、取材しながら作業をして、1 冊の本を書いてくださいました。県内の図書館にも寄贈してから 5 年以上経ちますが、あまり読まれていないようです。ぜひ読んでみてください。名取や閑上の図書館、名取北高校にもあります。



ここからはプロジェクトの変遷をご紹介します。これは震災から半年後。仙台空港に着陸する飛行機が見えます。またいつか津波が来たら、私たちが植えた木も同じようになるかもしれませんが、それまでの間、毎日私たちの生活を守るのがクロマツです。津波を止めるためにあるわけではありません。津波から 2 年半後、林野庁が植栽基盤盛土工事を始めました。



津波から 3 年後、宮城中央森林組合の 100 人のプロが集まり、3 週間ほどかけて一気に植えました。一番すごい人は 1 日で 550 本、90 秒に 1

本のペースで植えます。こういうスピードが大事です。本当に豪快に始めました。そのプロの方々は植えて終わりではなく、毎年草刈りに来て、間伐まで行ってくれます。一貫した作業なのです。だからこそ、少し言っただけですぐに通じるような、長い付き合いをしています。その年にはクズとの戦いを始めました（2014 年）。



これは初めての発芽の写真です。撮影には結構時間がかかりました。そこから 2 年かけて育て、やっと植えることができます。



これは植栽 1 年後。写真の右手前は、名取市民 350 人で植えた植樹祭のゾーンです。5 回行いましたが、名取市民は植えるのが上手で、一度もやり直しがありませんでした。通常はやり直しが必要です。



植えてから2年後、3年後、4年後と経過し、これが6年半後の様子です。黄色の丸の中に私が入っています。これは間伐前の状態です。後ほど間伐後の写真をお見せします。ちなみに、今回の育林交流集会のチラシに使われている写真は、私たちの現場をドローンで撮影したものです。

間伐についてお話しします。私たちの現場では90%以上が1回目の間伐を終えています。間伐の目的は、木を強くするためです。最強の防災林を育てるために、間伐は不可欠だと考えています。

間伐後、光が地表近くまで届きます



これが間伐3年後の様子です。間伐は合計5回行います。当初は1ヘクタールあたり5,000本植えましたが、最終的には800本から1,000本程度になる予定です。様子を見ながら決めていきますが、この40年後というのは、確か福島原発が廃炉になる頃ではないかと思います。向こうも頑張っておられますが、私たちも同じく長い時間がかかります。

本当に様々な調査を行っています。森林総合研究所の皆様によるプロ中のプロの調査で、根を掘り出したりしています。



これが最近の写真、サイクルスポーツセンター

です。名取市海岸林の北半分を一周する4キロメートルのコースがあり、2時間500円で自転車に乗ることができます。立ち寄り湯やレストランもあり、屋上には10時から無料で上がれます。



これは仙台空港の真東、堤防の上からの写真です。この先5キロメートルに先ほどのサイクルセンターがあります。



これは先日、大阪から来たボランティアの方が撮ってくれた写真です。

繰り返しになりますが、「愛される海岸林」でありたい。そのためにどのような道のりを歩めばよいかを常に考えてきました。宮城中央森林組合、松島森林総合のプロ、名取市海岸林再生の会、そしてボランティア延べ2万6000人の方々に関わっていただきました。これほどの森林は他にはないのではないかと思います。大勢の人に関わってもらうためには、計画、目標とその計画に対する共通のイメージを持って作業することが重要です。単なる草刈りではなく、「何のために汗をかくのか」「海岸林は何のためにあるのか」「なぜクロマツなのか」。これらをよく理解してから汗をかくのとそうでないのとでは、作業の質



が全く違います。素晴らしい大人のチームができたと思います。これまでの15年間、とにかくできるだけ大勢の人から少しずつ協力をいただき、共感や感動をしていただけるよう努力してきました。「そもそもなぜ必要なのか」「なぜクロマツなのか」をしっかりと理解してもらえるよう、半永久的に、本当に丁寧に説明しながら汗をかいてもらっています。



塩が飛ぶと書いて「飛塩（ひえん）」と言いますが、飛塩の防止が名取にとっては一番大事だと考えています。後ろに農地がたくさんあるからです。他にもないクロマツだからこそ、この役割を担えます。消去法です。他にも様々な木を植えた形跡はありますが、大体全国どこへ行ってもそうです。そんな中でやはりクロマツしかないということで、クロマツが基本なのだと思います。400年前に伊達政宗公が浜松で勉強して宮城で植え始めたと言われています。

私たち名取のプロジェクトの特徴は、ボランティアを「戦力」として考えていることです。本気で集まっている人間だからこそできる人海戦術だと思っています。



残り1分となりました。今どのようなボランティア活動を行っているかをご紹介します。私たちの現場100ヘクタールのうち、植栽地の約2割にクズが侵入しています。どこまでも追いかけて、四つん這いになって作業します。



これが作業完了後の写真です。上にクズがあるように見えますが、下は全部刈ってあります。



1週間後にはこうなります。きちんとやらないとこうなります。



そして最新の情報ですが、これからはこれとの戦いです。「松くい虫」がついに来ました。きちんと対応しないとこうなります。行政の皆様、そして我々と、知恵の限りを尽くし、皆様の力を信じて徹底的に戦っていきたいと思います。こうし

たゴミも次々と捨てられます。私たちにまだ何か
が足りないのだと思います。

ちょうど時間になりました。ここから若い人の
写真が色々あったのですが、最後にこれだけ言わ
せてください。名取北高校野球部は創部 45 年ら
しいのですが、東北大会出場が決まりました。9

日の試合で勝ったら、もしかしたら 21 世紀枠に
選ばれるかもしれません。毎年ボランティアに来
てくれているので、そうあってほしいと思いま
す。山形の鶴岡東高校と戦います。応援に行こう
かと思っています。色々ありましたが、時間にな
りましたので終わります。

【質疑応答】

Q. 名取の海岸林がこれほど立派に再生された背景には、吉田様を支えてこられたご家族の存在があっ
たかと思います。ご家族への感謝や思いについてお聞かせください。

A. 私は東京在住で、家族も東京におります。本日で 386 回目の出張となりますが、家に帰ると猫です
ら「なぜ帰ってきたの?」という顔をするほど、家を空けることが多い生活です。家事は一生懸命行
い、家庭での役割も果たそうと努力はしておりますが、家族には苦勞をかけ申し訳ないという思いがあ
ります。

Q. 東京都ではスギやヒノキの種を採種園から提供して苗木生産を行っていますが、発芽率が安定せず
苦勞しています。先ほどのお話でクロマツの発芽率が非常に高いと伺いましたが、種はどのように調達
されたのでしょうか。

A. 種は基本的に、宮城県林業技術総合センターから提供された「マツノザイセンチュウ抵抗性クロマ
ツ（一次検定品）」を使用しています。県内の激甚災害を生き残った強いマツを母樹として採種園で育
て、そこから採れた種を使用しています。種は新鮮な状態であることが重要で、1 年置くと発芽率は
15%ほど低下すると言われてしています。この他にも香川県や徳島県などいくつかの県から提供をいただき
ましたが、いずれも宮城県を通じて林業種苗法に則り適切に調達し、適期に播種することを徹底してい
ます。これが高い発芽率の要因だと考えています。



パネルディスカッション



長野 それでは、筋書きなきパネルディスカッションに入りたいと思います。

本当に台本がないので、自由に話していただくということで、こちらには未来を担う次世代のコメンテーターとして3名の高校生に並んでいます。折を見て振っています。

それぞれのプレゼンを聞いてみて、共通点として「伝統」や「育てる」ということがありましたが、一つ大事だと思ったのが「地域に根ざして連携すること」です。ボランティアの方など外から来る方もいますが、やはり大事なのは地域のことだと思いました。そのあたり、地域で連携する重要性について、パネラーの皆さんからご発言いただけますか。

福田 私自身のことになりますが、長野さんと同じ林野庁の出身で、この仕事を始めたきっかけは、国有林の森林事務所が浄法寺にあり、大震災があった年から3年間、担当区の主任森林官を務めたことでした。その時に、地元の人と積極的に関わること、例えば漆掻き職人のおじいさんたちのところへ見学に行ったり、役場の人や駐在さんと飲みに行ったりしました。

肩書があったとしても、まずはそこに住んでいる方々と交流するのが基本であり、大事だと思いました。それがあったからこそ、企業として事務所を建てて事業を行えたと思っています。いきな

り東京本社の会社が地元に入って行って、何か始められるわけではありません。そこは自分の持ち味であり下地があったからこそ始められました。

うちの若い職人は20代、30代で県外出身者です。東京、新潟、秋田などから来ています。まず考えたのは、彼らが地域にどう馴染むかです。積極的に懇親会の場や自治会、お祭りに行くように巻き込みました。中には趣味のランニングを生かして地元の駅伝チームに入り、それがきっかけで今の奥さんと出会った社員もいます。

常々意識して小西美術という会社があること、その誰々さんと名前を知ってもらうことは、何をする上でも大事だと思い活動しています。

長野 どの誰か分からない人が来ると怪しまれますよね。吉田さんはどうですか？東京から来て、どうやってここまで馴染まれたのですか？

吉田 それはまあ、飲むのが好きだということですね(笑)。

質問と少し違うかもしれませんが、なぜ我々が名取だったかということ、たまたま震災から1ヶ月後に元名取市民の方がオイスカに「手伝ってくれ、地元を繋ぐから」と言ってくれたのが一つのきっかけでした。ヘリで飛んだ後、連休明けまで待って現地に入った時に、名取市海岸林再生の会の農家の方たちと避難所で会いました。

オイスカという団体がどうやってプロジェクトを見つけるか、どうしてそこを選ぶかというのは、やはり「地元」なんです。木を植えたくて場所を探すのではなく、やりたいという「人」を探す。たまたま一発目で運命的な出会いがあったからであり、地元であることは当然のことです。

長野 森はどこまでいっても地域の物ですし、その土と離れては存在できないものですからね。齋藤さん、木や建物を建てる時はどうですか？



齋藤 私が心がけていることですが、今どの業界も人材不足で、建築も同様です。大学生などは大手ゼネコンやハウスメーカーへ行き、東京の方へ流れてしまいます。地元の建築家が育たないのが現状です。

地元の建築家がいなくて困ることは、東日本大震災の時に「この建物は大丈夫か、見に来てくれ」と言われた際、私は当時まだ若かったので駆けつけて、「この建物は大丈夫そうですね、避難施設として使えますよ」と判断できましたが、10年後、20年後を考えた時に、果たして見てくれる人がいるのかという心配があります。地元の建築家や設計者を育てないと、いざという時に駆けつけられるか心配です。公共施設などの大きい建物はどうしても東京の設計事務所に行ってしまうのですが、地元の建築家を育てる工夫をしていただけると嬉しいなと思っています。

長野 大工さんも足りなくて仕事が回らなかったり、資材も高騰して家が建たなかったりという話もありますね。地域で回していくために、私たち大人も頑張るって人を育て、繋げていくのが大事です。

長野 人手不足で仕事が回らなかったり、資材高騰で家が建てられなかったりというお話がありました。地域内で回していくことと同時に、外から伴走してくれる人とうまく連携できるのかと、お話を聞いていて思いました。

さて、高校生の皆さんも「桜プロジェクト」で植樹のために地域に行かれていますと思いますが、高校生が行けば無条件で「ウェルカム（大歓迎）」なのでしょうか？ それとも、そうでもないのでしょうか？

高校生(3年生) 今は沿岸部に行くと、結構受け入れてくださる方が多いのですが、12年前に先輩方が活動を始めた頃は、やはりあまり受け入れてもらえないこともあったそうです。ですが、12年間活動を継続していることで、地域の方々にも活動が知られるようになり、最近では自分たちが行くとき快く受け入れていただけるようになりました。本当に地域の方々にも声をかけていただきながら活動できています。

長野 素晴らしいですね。地域の人と触れ合ったり、全く知らない場所に行ったりすることについて、皆さんはどんなふうに感じていますか？

高校生(2年生) 活動を通じて色々な人に知ってもらい、それぞれの地域に行ったりすると、自分たちだけで初めて行く場所もあったりして楽しみもあります。また、そこで新たな課題が見つかったり、今まで知らなかったことを知ることができたりと、地域の人たちと繋がることで新たに感じられることが多いなと思います。

長野 ちなみに、地域に行く時は旅費などがかかりますよね。それはどうしているんですか？

高校生(3年生) 基本的に交通費は自分たちで稼ぐようにしています。

研究費も交通費も必要ですし、繋がりを作るには結構お金がかかります。そのため、私たちは色々な大会に出場して、優勝したらもらえる賞金を狙っています。



長野 素晴らしい。「賞金稼ぎ」ですね(笑)。でも、優勝しないともらえないわけですから、実力がないと狙えませんよね。

高校生(3年生) 例えば、発表の中で触れた「文部科学大臣賞」をいただいた際も、副賞の賞金が20万円だったので、その20万円を狙って勝負しました。

長野 持続可能な取組にするには、資金はすごく大事なことです。皆さんも森林づくりは良いことだと分かっていますが、続けるには先立つものが必要です。子供たちは実力で賞金を稼いでいますが、大人の皆さんはどうしているのかお聞きしたいと思います。齋藤さんはいかがですか？

齋藤 私は設計の立場なので、戦い続けたいといけません。受注を取るためにですね。県のCLT等普及推進協議会などは、それだけでは儲からない活動です。観光客相手ではないですし、県庁から「頼むよ」と言われてやっているようなものですから。目標は自分たちの知識を高めることです。みんな持ち出し(手弁当)でやっている感じです。自分たちの知識を高めて、それを本業の中で活かし、最終的には仕事を受注できるという流れを作っています。そこがプラットフォームになって仕事がもらえるようになるまでは、歯を食いしばって自腹でやろうというパターンで、9年間頑張っています。

長野 なるほど、ぜひ発注してあげてください。福田さんのところはどうですか？文科省が「国産漆」と言ってくれましたが、結構儲かるのですか？

福田 儲かりません(笑)。今、漆を掻いているのは、昔、漆が売れない時代でも地元の方が自分の土地に植えて育ててくれた木があるからできて

いるわけです。我々が植え始めた木はまだ7年目なので、これから先、手入れが必要です。農地に植えているというお話をしましたが、そうすると森林整備事業の補助金は使えないんですよ。ですから、銀行からお金を借りてやっています。そこまでしてなぜやるかという、やっぱり我々の本業は「川下(かわしも)」だからです。小西美術は修復が本業ですが、「川上(かわかみ)」の方で高齢化が進んだり、天然の資源がなくなったりすると、そもそもの本業自体ができなくなります。今、色々な業種で、川下の業者が川上の手入れや資源育成を行うというのがトレンドというか、やり始めていることなのかなと思っています。川下の人たちが一貫して行うことで、川下の利益を全体として川上の持続性にも還元していくということですね。

長野 吉田さんは寄付を10億円集める手腕をお持ちですがいかがでしょうか。

吉田 ちょっとオイスカのことにはさておいて、名取北高校の男子が、昨日、チラシを表で配ってくれて、12時くらいまで徹夜でやってくれていたそうです。彼らも「名取こどもファンド」という助成金を自分たちで取って、先生の指導もいただきながら、今日を皮切りに名取市民に向けて、僕らの分まで広報活動を手伝ってくれるということです。

話を戻すと、私たちのプロジェクトは、最初はオイスカのトップに、計算もしていないのに「10億円集めます」と言って始めたんです。間伐をする費用というのは最初の計算に入れていなかったんです。苗木が枯れなかったからですね。本来は失敗するコスト(植え直し等)を入れての10億円だったのですが、枯れなかったのも、その分「間伐もやれるところまでやる」「お金がなくなるまでやる」という考え方で進めています。だから、いつ終わるか本当に分からないのですが、財



布は閉じていません。オイスカとしては、日本でもやらなければいけません、海外の方が単価が安いので、同じお金があれば世界でやった方が森をもっと作れる、そちらに力が入ります。こっちも欲しいのですが、そればかりやっていたら世界のことができなくなる。今日はスライドでそのくんだりまで至りませんでした、10億円はまだまだですので、いつでもよろしくお願ひします。

長野 やはり森林づくりというのは、10年20年では終わらないですし、最初は未来への投資なんですよ。だからその投資を誰がどういふうにしていくなかということがすごく大事です。20万円に比べて10億円という話が出ましたが、森を繋いでいくためには、私たち大人も頑張ってお金も含めて続けていき、人をつくって繋げていくのが大事ですね。

今回の育樹祭のテーマ「次世代へ」のとおり、かけ橋になっていかななくてはいけません。先輩が植えた木を使って、それを自分たちがまた次に繋げる植樹をしている。世代を超えて繋いでいかななくてはいけないと思っています。先輩からのメッセージを受け取ったり、後世にどんな形で残していきたいかといった想ひはありますか？

福田 木もそうですが、本業の修復における職人の育成も、まさにそれをやり続けるのがうちの会社です。伊勢神宮の式年遷宮（20年に一度）のような大きなサイクルもありますが、例えば小西美術であれば毎年高卒を採用しています。先輩が1年上について、さらにその上がいて、ずっと続いています。親方が現場に一人いて、その下に手持ちがいてやっと仕事ができます。

親方は仕事をしながらその姿を若い人に見せ、中堅を育て、新人は「いろはのい」から教えなければなりません。

覚えたものを、今度は自分が教える側に回る。そういったことを自覚的になりながら、うちの職

人たちはやってきていると思います。

資源の方、ウルシの木は残るものです。今植えてあるものが、15年前、20年前にどなたが植えたのかを買取する時に聞きます。ウルシの木を探るところから漆掻き職人の仕事が始まります。「ここの畑の木の持ち主は誰ですか」と集落の人に聞いて訪ねると、90歳くらいのおばあちゃんが出てきて「死んだ爺様が植えた木なんだ」と言ったりします。明日にも倒れそうな木であればすぐには買わなければなりません、そういった方がいてこそだと実感します。必ず若い職人が掻く時は、その方のお家に行って「掻かせていただきます」と挨拶してからやるようにしています。そうすると、そういった心が育ってくるんじゃないかなと思っています。

長野 齋藤さんのところも、木造建築の人づくりを含めてやられていると思いますが。

齋藤 私は設計を始めてから木造建築に携わることが多く、本物の木を使った家は温もりがあります。自宅もマツのフローリングとタモのフローリングを貼り分けているのですが、子供は夏、硬い木だと冷たくて気持ちいいと感じて寝そべります。今はプリント物も精度が良く、分かりにくくなってきていますが、本物の木を使い方も含めて繋いでいきたいです。建築家協会でも木育をやったり、山に登って木の匂いを感じてもらう機会を作り、木を使える建築家を育てていきたいと思っています。

長野 コンクリートや鉄骨の工法も戦後50年くらいかけて広がったので、木造の歴史の方が長いですからね。高層建築でも床だけ木にするなど適材適所で使えるので、可能性を見極め広げていきたいですね。クロマツ林の完成が2070年でしたっけ。あと40年くらい。我々は死んでますよね。





吉田 死んで誰もいないので（笑）。完成形が見られないのは分かっています。最初から世代を跨ぐのは分かっていました。プロジェクトとは何かと考えた時、当然次世代の人、ボランティアの人もそうですし、「老壮青」いろんな年代の人が来るとお互いに楽しく勉強になります。小西さんたちも職人を育てると言われていましたが、今、日本で「植える技術」、植えたことのないプロがいっぱいいます。名取で植える時に89人のうち「初めてです」というプロがいっぱいいました。植えるところの技術、どういう神経を使わなければいけないか、すごく気を使った覚えがあります。若い人を育てるといふか、一緒にやるというか、こっちも手探りながら失敗も成功も見てもらいながら一緒にやってきましたし、これからもそうであって欲しいと思っています。

長野 ありがとうございます。科学部の世代は、どうやって先輩から引き継いで後輩に伝えているんですか？3年生、2年生といますが、やっぱり先輩の姿を見て学ぶのでしょうか？

高校生(2年生) 私は「さすがだな」と思います。

長野 さすがだな、と。やはり2年生と3年生では歴然と差があるわけですね。

高校生(2年生) こういう場所で、さらっと、2年生だと気づけないようなことを3年生の先輩方が

言うのを見て、さすがだなと思います。

長野 だそうですわ、部長。後輩の育成とかは何か意識されているんですか？

高校生(3年生) 勝手に育つんです。「俺の背中を見て」タイプですね。うちは指導とかは緩い部活だと思います。体育会系に比べても。知識を入れる場と実践する場が明確にあって、その時々集中してやっているの、私が教えなくても勝手に知識が入るし、実践できるようになる。だから、あまり指導はしないですね。

長野 2年生はどうですか？見ながら覚えるというのがありますか？

高校生(2年生) 見ながら覚えるというのはありませんね。大会などに出ても、その立ち回り方とか。

長野 立ち回り方（笑）。

高校生(2年生) はい、大人の方との関わり方とか、そういうのが勉強になります。

長野 職人さんも同じような感じで、そうやって一緒にやりながら学ぶんですね。今はあまり厳しく言うと世知辛い世の中ですからね。1年生はどうですか？先輩の姿を見て。今日は司会の大役も務めてもらっていますが。

高校生(1年生) そうですね、本当に先輩のすごい姿をいろんなところで見っていたので、「こんなすごい人が近くにいたんだな」とよく思っています。

高校生(3年生) 今の場だとすごいしっかりしたコメントをされるんですけど、学校に帰ったりすると、普通に結構いじられます。



長野 結構いじられる(笑)。でも、そうやって楽しく仲良くやるっていうのも、持続性には大事なことですからね。素晴らしいです。大人も勉強になりますね。

長野 ここは名取ですから、震災のことも少しお伺いしたいと思うんですけど、吉田さん。クロマツを植え続け、また次の津波の時にあなってしまうかもしれないけれど、クロマツを植えることで残していける震災の教訓のようなものがあるんじゃないかと思います。忘れてはいけない教訓を教えてくださいませんか？

吉田 本日、観客席に大槻さんがいらっしゃいます。大槻さんは名取市民で、今まで1万5,000人ぐらいのボランティアを一緒にずっとやってくれた方です。大槻さん、震災の教訓を皆さんに伝えていただけますか？いきなり振ってごめんね。

大槻(会場) 大槻でございます。今日このような形でお話を聞いて、改めて勉強になっております。吉田さんとの出会いは13年も前になります。元々体を動かすのは得意ではなかったのですが、オイスカの発表会があった時に東大の太田猛彦先生のお話を聞いて、「自分にもこれならお手伝いできるんじゃないか」と思い、翌日から吉田さんと一緒にバスに乗って現場へ行きました。その後ずっと活動しております、多い時は年間60から70日お手伝いしておりました。今は年も

年なので休んでいますが、皆さんの顔を見るのが楽しみで頑張っております。

長野 ありがとうございます。そういう地道な繋がりが、この活動を13年続けてこられた理由かなと思います。

吉田 教訓ではないですが、一つ僕がすごく大事にしたことがあります。今はみんな言いたい放題でまとまらない世の中ですが、地域には「親分」みたいな人がいて、「四の五の言うな、俺が言ってるんだからこうしろ」とまとめてくれるような、古き良き親分みたいな人があまりいません。復興に際して国や県、市など色々ありますが、僕らは「復興計画そのものに協力をしよう」という考え方でした。行政の良い計画、真剣にやろうとしている計画があるなら、それに協力するのも我々NGOや民間の役割です。何でも国や行政にやってもらおうという「ぶら下がり根性」ではなく、セルフリアイアンス、自助努力。それが大事だと思い、自分で金を集めてちょっとでも協力できるようにと考えたことを思い出しました。

長野 ありがとうございます。震災からの復興について、国も応援するけれど、その中で自立しながらやっていこうという教訓をいただきました。

そんなことを言っている間に時間が迫ってきました。最後はこのメッセージに繋げるために、大人の皆さんから、森林づくりでも地域づくりでも人づくりでもいいので、次世代へのかけ橋となるようなメッセージをいただいて、子供たちがどう思ったかを聞きたいと思います。無茶振りでもいいですよ。では福田さんから、未来へのメッセージをお願いします。

福田 高尚なことを伝えられる立場でもないのですが、9年目で、まだ自らがしっかりと地域に立って育てた木で漆を採ることを目指している途中で



す。自分で立ち上げて今までやってきた中で思ったのは、吉田さんの発表にもありましたが「やり続ける」ということです。初志貫徹。やり続けることによって、自分は変わらなくても周りの応援や見られ方が変わり、味方や仲間が増えて、当初は考えもしなかったことが実現できるとこの9年間で体験しています。何もないところから自分がやりたいことの間隙を見つけ、こじ開けて継続していく力。これは若い人には試練でもありますが、成し遂げると自分に力がつきます。そういったことを一生懸命やっていると、後輩たちがその姿を見て「自分もできるかもしれない」という勇気を与えることになると思います。やり続けることが、いつか次世代に伝わり、繋がっていくことになるんじゃないかなと思っています。

長野 素晴らしいメッセージです。やり続ければ周りもついてくるし動いてくる。9年やってきた実績からの言葉、素敵だなと思いました。齋藤さんをお願いします。

齋藤 震災の話もありましたが、宮城県はどうしても30年に1回ぐらい大きい地震が来たり、最近だと水害も多いので、いつ地震が起きてもいいように備える必要があります。能登や台湾でもありましたし、日本全国どこにいても災害が起きるんだよというのを頭に入れていただきたいです。

常日頃、自然を大事にしながら自然と遊んだり、自然の木を使って家を建てたり、一緒に取り組みながら進めていけたらと思っています。地震が急に起こるとどうしたらいいかわからないと思いますが、どこに逃げるか、窓を開けるとか水を貯めるとか、そういう知識をみんなで共有して備えていきたいです。私も自然で遊ぶのが好きなので、山登りやゴルフ、サバゲーなどを通じて自然を守ったり、子供もそれを把握したりするので、自然と楽しむというのをみんなでやっていけたらなと思っています。

長野 ありがとうございます。吉田さんをお願いします。

吉田 僕の仕事は始まって14、15年でまだ途中なので、結果を見ることはできません。その過程を一生懸命やり続けるというのは福田さんと同じです。

今、すごく嬉しいのは、若い人が増えてきていることです。今日もそこにいわゆるギャルみたいな子もいますけど(笑)、若い人が増えているのがすごく嬉しい。なんでここまで来れたかという、ボランティアの人が周りにいて、軍団でやってきたからです。だから辛いとは全然思わなかった。まだ途中ですが、これからも必ずやり遂げるので、どうぞ見ていてください。

長野 結論は見えないけどやるんだ、という。森林づくりはそういう思いが繋がって、私たちに繋がっている森があるんだと思います。さて、この大人の熱苦しい意見をどう受け止めたか、学生の皆さんに聞きたいと思います。まず2年生から、どうですか？未来にこうしたらいいよという言葉をいただいて。

高校生(2年生) 今日こうやってプレゼンターの方々と色々なお話を聞かせていただいて、新しく得たこともあります。それを自分たちだけに留めずに、イベントや大会で新しい地域の方、それこそ大会に出ている高校生で同い年の人たちもいるので、そういうところに新たにかけ橋としてかけていって広めていければいいなと思いました。

長野 素晴らしい。もうお一方は、どう感じましたか？

高校生(1年生) そうですね、文章をうまく作れないんですけど、色々なお話を聞いて、私もよく色々なイベントや部活で出たりするんですけど、そ



ういうところで色々発信していけたらなと思います。あと、後輩にも色々繋げていけたらいいと思います。

長野 素晴らしい。ありがとうございます。最後に部長、締めてください。

高校生(3年生) 今日お話を聞いて、私たちの身の回りに意外と昔から受け継がれてきた文化とか、社会にとっていいことがたくさんあるなと気づきました。その機会を今までは見過ごしてきたのかなと思っていて、このいろいろなことを知る機会を得て、この機会を見逃さずに拾って、地域の方とかを巻き込みながら、私たち若い世代が怖がらずにとりあえずやってみるっていうのが大事かなって思いました。

長野 もう泣きそう(笑)。かけ橋繋がった瞬間じゃないですか？こちら側から架けてくれた。森林づくりは一人じゃできないし、一人で100本一気にやるより100人で1本やった方が必ず持続可能ですから。ぜひこのメッセージを皆さんも、高校生からのメッセージも一緒に受け止めて、さらにこの地域の自然資本である森林、先人が持ってきた伝統や文化を繋いでいけたらいいんじゃないかなと思いました。

ということで、テーマはうまくまとまったでしょうかね。そんな感じで、本当に高校生へもノー台本なんですけど、すごいと思います。名取の宝ですね。

ありがとうございました。



閉会挨拶

宮城県 仙台地方振興事務所長
嘉藤 俊雄



皆様、本日は長時間にわたりご参加いただき、誠にありがとうございました。主催者を代表いたしまして、一言ご挨拶を申し上げます。

本日は、オープニングアクトで、宮城県農業高等学校の皆様の活動発表をいただき、その後、プレゼンターの皆様からは、それぞれの分野での貴重な取組をご披露いただきました。また、パネルディスカッションでは、コーディネーターの長野様をはじめ、パネリストの皆様から、地域と森林との関わり、そして次世代への想いについて、熱く語っていただきました。

本日のこの集会在、皆様にとって実り多いものとなり、それぞれの地域での活動に繋がっていくことを、心より願っております。

結びに、本日の開催にあたり、多大なるご協力をいただきました、名取市をはじめ関係者の皆様、そしてご登壇いただきました皆様に、深く感謝を申し上げまして、閉会のご挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。

会場の様子





みやぎ 2025

第
48
回

全国育樹祭

次世代へ みどりのかけ橋 森づくり

発刊：令和8年2月

発行：第48回全国育樹祭宮城県実行委員会